

わが心の自叙伝

菅原洋一

.....▷8

音楽大学に入ってからしばらくして、バイクや自転車が欲しいと痛切に思ったことがある。何しろどこに行くにも便利だし、それよりなにより、私はオートバイや車など乗り物が小さい頃から大好きだったのだ。

しかし、貧乏学生の身には夢のまた夢。それがある日、自動車会社がスポンサーの「のど自慢大会」があることを知った。優勝賞品はなんと自転車だという。「これだ！」と思って早速応募した。もちろん学校には内緒である。歌った歌は「ジューラ・ジューラ」。その後も今までも何度も歌ったタンゴの名作を初めて歌ったのがその「のど自慢」である。審査員にも音大生であることを伏せて朗々と歌い始めた。結果は優勝。
私の元に新品のグリーン色の自転車が届いた。うれしくて下宿先から近い青梅街道や五日市街

◆ 自転車が欲しくって

道を走り回り、東京の空気を満喫したものである。そうこうしているうちに、この自転車にエンジンをつけてみようと思いつき、コッコツとお金をためて2年ぐらいかけてやっと実現させた。エンジン付きの、いわゆるスーパーカブに変身した自転車で国立にある学校まで乗りつけて、友だちにこれみよがしに見せびらかせながら得意になったものだった。

あつという間に学生生活も4年目になっていた。そろそろ先のことを考えなくてはいけない時期が来た。このままいけば1



大学時代、出場したのど自慢の優勝賞品の自転車に乗る筆者

年後には音楽の教師になるか、父の望みどおりに加古川の家に戻り、家業を継ぐことになるだろう。しかしらびやかでワクワクする、そして自分の考えが思い通りになるような錯覚を起かさせる街、東京は離れがたい。なんとかして、故郷に戻らな

い手はないものだろうか。そこで考え出したのは卒業後、学校に残って勉学を重ねる専攻科進学の道だった。つまり大学院だ。5年目の学生生活が始まっ

た。週1回のレッスン授業があるだけで時間的には余裕があった。「これからどうやって生きて行こうか」。もちろんオペラやクラシック歌手になる道はあるが、どうしても自転車を獲得した「のど自慢」で歌ったタンゴやポピュラー音楽に引かれる自分を否定できなかった。しかし学校の先生にこれを告げるわけにはいかなかった。「クラシック以外の音楽は音楽ではない！」という考えを持つ先生ばかりだからである。

そんな中で、ひとりよく話分かる先生がいらした。ドイツ歌曲やイタリア歌曲を教わった恩師の関種子先生である。先生は東京芸術大学出身だが、1935（昭和10）年に今もカラオケなどで聞く「およほぬこととあきらめました」と歌う「雨に咲く花」で「世風靡した人だつた。その先生のおかげで私の人生は変わっていくのである。（すがわら・よういち「歌手」）

学校に内緒で「のど自慢」優勝